東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

国際教養講座「国際理解」編の実践：第5 ／6回「コバルト会議」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属国際中等教育学校 公開日: 2024-04-25 キーワード (Ja): ETYP:教育実践, STYP: 中等教育学校 キーワード (En): 作成者: 藤木, 正史, 河野, 日南子, 山根, 正博, 廣瀬, 充, 宇佐見, 尚子, 小林, 万純 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000382

国際中等教育研究　第17号　p.95 ～ 100
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

国際教養講座「国際理解」編の実践

―第５/６回「コバルト会議」―

Practical Application of the “International Understanding” Section of the “KOKUSAI KYOUYOU”

－5th/6th “Cobalt Conference”－

「国際教養」グループ
地歴公民科　藤木　正史・河野 日南子
国語科　山根　正博・廣 瀬　充・宇佐見 尚子
外国語科　小林　万純

１章　はじめに

１節　国際理解講座の位置づけ

本校では国際教養の柱として、「人間理解・国際理解・理数探究」の三つの柱を設定している。ワークキャンプなどの行事においても、これらの三つの柱を意識した活動を組み込んでいる。通常の時間割にも国際教養の時間が設定されており（１年週１時間・２年週２時間・３年週１時間)、校内で継続的に取り組む活動として、2022 年度に NPO と連携して「国際理解講座」を開発した。2023 年度授業研究会においては、連続ワークショップを通して、重要概念「グローバルな相互作用」について理解を深めていく過程（全７回のうちの５回・６回）を公開する。

２節　授業研究会テーマ「探究の問いが育む概念的理解」との関連

国際理解講座では、最後に「国際理解とは？」についてのダイアログを実施する。この問いが本講座の最も核となる問いであり、この問いに向かいながら概念理解を促す。

今回焦点をあてる MYP 重要概念は「グローバルな相互作用」である。国際バカロレア機構(2022)『MYP：原則から実践へ』によると、「『グローバルな相互作用』は、世界をひとつの全体として見たとき、個人やコミュニティーがお互いや、それを取り囲む環境(人工、自然)との間で持つ『つながり』に焦点を当てた概念を指します。」とされる。

国のイメージや自分の見方を見直す個人レベルの理解ももちろんだが、目的に向かって合意形成をする際に、どちらか一方からの働きかけでも成り立たず、お互いがどのように関わっていくことになってしまうのか、関わっていくべきなのか、実体験をしながら概念理解を深めていく。また、その際、他の教科や活動での学びを活かすように促すことで、“学びの転移”も示すことができる。

３節　単元の設定と授業の概要

世界を俯瞰するワークを皮切りに、地域、個人にフォーカスし、社会課題と自身の国際社会との向き合い方や偏見についても認識していく。その上で、国際問題の根深さと解決の難しさを体感しつつ、問題解決に向けて考えを進める。平和構築が難しいことを体感し、これからの国際理解、国際社会の学びへとつなげていく。この単元は以下の５つのステップをもとに、7 時間で構成されている。

表　国際理解講座の概要

step1	**世界の状況を大陸別に考えるワークショップ&世界の現状を知る（１時間目）** テーマ　：世界の格差を可視化して、世界の現状・全体像を掴む 主な活動：ワールドマップワークショップ 　人口、経済、食料、HIV、エネルギー、オリメダル、パラメダルの 100%にできるデータから３つ選び、大陸ごとの予想データマップを作成する。現実の数字と比較し、現状のデータの解説及び現実と予想の差の原因を探る。
step２	**自分の世界の見方を知るワークショップ&振り返り（２時間目）** テーマ　：自分の世界の見方を認識する 主な活動：ワークショップ　世界のイメージラベリング 　世界地図に、自分のイメージのラベリングをしていく。書いた情報がポジティブなものなら＋（プラス）、ネガティブなものなら－（マイナス）、どちらとも判断が難しいものは±０の記号を右端に書き加え、地域別の地図に貼り付けラベリングしていく。各地域のイメージ情報とそのようなイメージになった理由を発表する。 　発表の後に、改めてそのようなイメージになった理由について振り返る。振り返りの際に、イメージ以外の事実の事例（アフリカの富豪、日本の貧困など）なども解説する。
step３	**様々な貧困の具体的ケーススストーリーをもとに、社会問題の具体的な状況を知る（３時間目）** テーマ　：自分の問題の見方を認識する 主な活動：ディスカッション　とある一日 　３種類のスケジュール（①児童労働者②日本の貧困家庭③日本の家庭）を比較し、気づきを共有する。それぞれのスケジュールの主人公のストーリーを読み、気づいたことを共有する。表面的な情報（スケジュール）から仮説を立てた後、個々のケーススストーリーを読んで、それぞれの立場の想いや考え方を知り、視点の偏りや自身の傾向などを振り返る。絶対的貧困（児童労働者）/相対的貧困（日本の貧困家庭）/心の貧困（日本の家庭）の３つの種類の貧困のケーススストーリーをもとに社会問題を知るとともに、自身の視点の偏りを再体験する。
step４	**平和構築の仕方について、ワークショップで体感する（４時間目）** テーマ　：平和な国際社会実現のために 主な活動：ワークショップ・ブロックゲーム 　チームに分かれてミッションカードを受け取り、チームごとにブロックに関するミッションの達成を目指す。ブロックの数には限りがあり、全てのチームミッションをクリアさせられるほどのブロックはない。ゲームはミッションを変えずに２度行う。１度目は他のチームと話すことはできない。２度目は他のチームと話すことができる。数に限りのあるブロックを使って、いかにミッションをクリアしていくか、交渉を進めることになる。その過程において、様々な利害が関係してくる中で、平和構築は、どう行動すれば実現しえるのかを考える。ブロックゲームを通して、パートナーシップ・平和の構築の仕方を学ぶ。
step５	**世界の問題解決に向けて、ケーススタディをもとに、ディベートの実施。SDGs の５つの P の視点から優先順位を考え、話し合いを行い、合意形成の難しさを通して、国際理解について考える（５・６時間目）** テーマ　：平和な国際社会実現のために 主な活動：ディベート【コバルト会議】 　コバルトの採掘をめぐり、自動車メーカー・採掘会社・市長の立場に分かれて、労働環境や周辺の環境の問題と調整を図りながら、採掘量を決める会議を行う。自分の選んだ立場の利益も維持しつつ、三者間での合意形成を目指す。この活動を通して、主張の異なるグループ間で合意を取る過程を体験し、合意形成の難しさ、優先順位について考えさせるとともに、多くの国が賛同した SDGs の価値への認識を深めさせたい。また、この活動の振り返りを通して、国際社会とどう向き合い、どう現実社会で平和を構築していくかを考えさせたい。

	まとめ（7時間目） 自分の視点を認識し、これからどう国際理解と関わるか、大切にして生きたいかを考える。個人の振り返りを全体に共有し、学びを深める。

2章　授業実践

1節　コバルト会議の具体的な流れ（全クラス共通）

この会議は、コバルトの採掘をめぐり、自動車メーカー・採掘会社・市長の立場に分かれて、労働環境や周辺の環境の問題と調整を図りながら、採掘量を決める会議を行うという設定で進められる。

①1クラス（30人程度）を3つのグループに分ける。

②3つのグループの生徒の机を、司会を正面にして凹の形に配置した。

③グループ内で共通資料を読み込む。共通資料には、コバルト採掘場を増やしたいという自動車メーカー（エレカ社）の希望、コバルト採掘場開発に反対する人権団体の見解と同じくコバルト採掘場開発に反対する環境団体の見解が記載されているが、採掘場開発に必要な経費とそれぞれの予算ついては記載されていない。（①～③に割り当てた時間は20分。）

④司会と記録を決め、それ以外の生徒は自動車メーカー・採掘会社（クチンバ）・ラフィキ市市長のうちどれかの立場を選択し、立場ごとに集まって座り、関係者だけが見る手元資料を読み込む。関係者だけが見る手元資料には主に以下の情報が記載されている。

自動車メーカー（エレカ社）：コバルト採掘ノルマ、プロジェクトの予算

採掘会社（クチンバ）：予算、労働環境改善のための費用

市長（ラフィキ市市長）：使える予備費

コバルト採掘場の開発と濾過システムの設置（環境面の配慮）と労働環境の改善（労働者の人権への配慮）に資金が必要だが、三者の使えるお金を集めても全ての要望をかなえることはできない。何を実現し、何をあきらめるのか、そのための交渉をコバルト会議で行う。

今回の授業では、関係者だけが見る手元資料を読んでいる間に、全クラスの司会と記録を集めて、問題点を共有し、議論の大まかな方向性を確認した。また、作戦立案や話し合いを円滑に進めるために、採掘場をいくつ開発するか、濾過システムをいくつ導入するか、労働環境の改善を何カ所で行うかをまとめるためのプリントも使用した。（④に割り当てた時間は20分。）

⑤各グループに戻り、役割ごとに作戦を立てる。（⑤に割り当てた時間は5分。）

⑥会議を開催する。自分の選んだ立場の利益も維持しつつ、三者間での合意形成を目指す。（⑥に割り当てた時間は30分。）

⑦会議終了後、達成できたこと、できなかったことをまとめる。

⑧今回の話し合いにおいて、結論を出す際に何を優先したか、振り返る。SDGsの5つのPのうち、何の観点を優先させたかを振り返り、その選択が未来をどう変えていくのか考える。（⑦⑧に割り当てた時間は20分。）

2節　1組の実践報告

1組の生徒は活動のたびに毎度3グループとも違う結果になった。意図せずそれがクラスの中での大きな学びとなり、決断に対しての過程が優先順位や情報量などから変化が生じること、グループによって捉え方や結論の導き出し方が違うことなど、実社会で起こり得る「グローバルな相互作

用」に関する場面を実際に体験することとなり、非常に興味深かった。言語の問題ではなく、どの程度相手のことを知ろうとするのか、力づくで解決することを選ぶのかは国や人によって決断が変わってくる。また、何かを決定する際にも、自らの目標達成のみを視野に入れるのか、全体で妥協点を探しにいくのかによっても交渉の仕方が変わってくる。ただ、そこに感情が強く入ってくると、論理よりも上回るかもしれないというのも実践から学びとれる部分である。感情移入して体験してみることで、より人間の行動に近い実際の学びに繋がったと言えるだろう。

公開授業の「コバルト会議」でもしっかりと役割になりきり、それぞれの立場で交渉をしていた。グループ１は全体のバランスをとり、それぞれの立場が少しずつ妥協することで、概ね全体の目標を達成し、次年度に持ち越す課題点をそれぞれが痛み分けをするという結果になった。グループ２は市長が先進国に忖度し、先進国の要望をまずは叶えることで長期的なパートナーシップを築くことを最優先とし、市長の希望である水質改善も進めた。これは途上国での市民の劣悪な労働環境や健康被害が解決されないことを意味し、ひいては市長選の落選等の課題点も見えるが、長期的な経済発展を約束することで経済を安定させ、次年度以降からの安定を市民に約束するという戦略を立てていた。グループ３はそれぞれしか持っていない独自の情報をあまり共有したがらず、目的の主張がぶつかり、全く目指している合意にたどり着けなかった。それは事業が実施できないということになり、次年度以降の見通しも不透明のままとなった。ただ、生徒の振り返りでは「妥協すると国に影響が生じるため、簡単に引き下がれなかった」と書かれており、国の事業を背負っているという意識までロールプレイ出来たことにより、数値的な妥協点だけを出せば良いだけではないという国際協力の難しさを肌で感じ取れたことがわかる。

図　コバルト会議の様子

結果がどうであろうと、その課題に向き合うことで学ぶことがある。むしろ一つのメッセージを教師から与えるより、自分たちで体験して結果が出たことで、より一人称として、経験値として、学びにつながる様子を見ることが出来た。教師は答えを教えたり誘導するのではなく、その行動から読み取れることを生徒にメタ認知させることで、より深い学びにつなげていくことが可能なのである。

３節　４組の実践報告

４組では、最終的には３グループとも合意に達したが、その内実は大きく異なる。あるグループはコバルトの採掘量のノルマ達成をあきらめ、濾過装置の設置と労働環境の改善を実現させた。残りの２つのグループはコバルトの採掘量のノルマは達成したが、片方のグループは濾過装置の設置をあきらめ、もう片方のグループは労働環境の改善を実現できなかった。

「思っていたよりもどのチーム引かず、折り合いをつけるのもとても大変だった」という状況になったグループもあったようだが、にもかかわらず最終的に全グループが合意に至ったのは、妥協したとしても自分にリアルな不利益がないフィクションの中での出来事だったという面もあるかもしれない。しかし、フィクションの中での会議にもかかわらず、生徒たちは熱心にお互いの利害調整を図っていた。コバルト会議の様子を見ていると、グループ内で形成された合意が安易な妥協で形成されたものではなかったことは、「それぞれの立場や予算を考慮した上でお互いが納得するような案を出すことがとても難しかった。」「お互いに情報をしっかりと伝えあうことも大事だと思いま

した。」「情報共有が大事だと思った。また、ある程度の妥協と思いやりが大事だと考えた。」「誰かが妥協しないといけない。経済などを考えるのはとても大変だと思った。」「それぞれの希望を聞き取り、調和を取るのが難しい。」「自分が想像したよりも多くの事を考えないといけないことに気づいて、どこを妥協するかをいろんな条件から考えることが大切だと感じた」といった生徒の振り返りのコメントからも窺い知ることが出来るだろう。生徒の中には、合意形成のためには、自分のノルマの達成を第一に考えながらも、相手の立場にたって考えることの必要性を強く感じた者もおり、「それぞれの意見もくみ取って歩み寄ることが大切」「複数のグループが自分たちのグループだけでなく、他のグループが得られるメリットについて説明していたことがとてもよかったと思った。」「話し合い楽しかったです。いろんな面で考える必要があるので。想像力が大事だと思った。」「自身の大切と社会的な大切の価値観を持つことが大切」といったコメントが振り返りの中にあった。コミュニケーションをとる、情報を共有する、相手の立場も理解するといったスキルの重要性を強く意識することができるプログラムであった。

３章　協議会・来場者アンケート

１節　協議会の概要

まず、ワークショップの共同開発者である認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンの担当者から、コバルト会議でのねらいについて「現実社会において、課題となっていることを疑似体験してもらう会議」であること、「国際会議と近しい状況を再現しており、中学生でも理解しやすいように構成している」こと。学校と NPO の連携があって、行うことができることについてお話を頂いた。

参加者からは、「子どもたちのディスカッションをみたときに、高校生のようなポテンシャルであると感じた。中学 2 年生で、レベルの高いディスカッションができるのは、普段の授業でも訓練しているからなのか？」という質問があり、授業担当者からは「今回のディスカッションが活性化した理由の一つには、4 時間目のブロックゲームの経験がある。メンバーが、話し合えば結論が出るのだと考えられるようになったことが大きい。」とコメントした。

２節　来場者アンケートにおける授業及び協議会についての意見・感想

公開授業については、「生徒が主体的に討論」していることや「問題解決に向け、個またはチームで真剣に議論する姿」「主張の異なるグループ間で合意を取る過程を体験」していたこと、「授業時間の大半を生徒たちに委ね、」教員は「コーディネーターに徹していた点」などが、授業の良かった点や参考になった点として挙げられていた。また、「最終的にどの立場が良いのか決めるのでも良かったのではないか」「学校のフィードバックの工夫についてさらに知りたい」との意見もあり、授業の今後のあり方を検討する際に参考となる意見や、授業の振り返りやフィードバックも含めた授業の構成の重要性を再認識させる意見が寄せられていた。

協議会に関しては、「教科横断的な視点」での協議などが行えるとよかったという意見や「ＮＰＯ法人と共同開発した教育プログラム」についての説明が「今後の参考になった」という感想が寄せられていた。また「外部との連携の良し悪し」について「これからも考えていかないといけない」との意見もあり、「外部連携」という視点から今後のあり方をさらに検討する必要がある。

4章　おわりに

公開授業当日を迎えるまでに、教員同士で多くの打ち合わせを重ねたが、その中で懸念していたのは、生徒がどれだけ自分たちの力で課題を解決できるかという点であった。特に国際理解講座全7回のうち、本時にあたる第5・6回は、資料の分析から考えの形成、議論の整理、合意形成までのほとんどの過程を生徒たちだけで進めていく内容であり、それが達成できるかどうか心許ない状況で臨んだ面もあった。

しかし、その不安が杞憂であったことは、当日の様子や、協議会・アンケートで寄せられたコメントからも明らかであろう。生徒たちは、協力して資料を読み込み、合意形成を図りながら結論を導き出すことができた。そしてその議論の質は、本研究グループの想定を超えるものであった。

こうした生徒の姿を引き出すことができた要因として考えられるのは、いささか感情的な記述になってしまうが、生徒の力を信じ、委ねたことだろう。「うまくできるかわからないだろうけど、とにかくやってみてごらん」と背中を押してあげる。それはつまり、学びの責任を生徒自身にもたせるということでもある。「中学生だからできない」「生徒の実態から考えるとまだ早い」と決めつけるのではなく、ひとまず委ねてみることで、結果的に生徒の力をこれだけ引き出せたという事実は、本研究グループにとっても大きな発見であった。

全7回の講座を終えた生徒の振り返りの記述を見ると、様々な要因の上に成り立つ複雑な関係性の中で、多様な文化を背景とした国や地域が相互に理解し合うことの難しさを実感した生徒が多いようだった。また、その関性係を普段の学校生活や学級における人間関係に重ねている生徒も多かった。重要概念「グローバルな相互作用」に対する理解の深まりや転移と見ることができよう。

こうした学習経験を重ねた生徒たちが、今後どのように探究し、概念理解を深めていくのか、継続的に見取っていくことを今後の課題としたい。

Practical Application of the “International Understanding” Section of the “KOKUSAI KYOUYOU”

－5th/6th “Cobalt Conference”－

Abstract

The workshop, developed in collaboration with a non-profit organization, showed how it can trigger students to think about the question, "What is international understanding? In doing so, it became clear that the teacher's stance of trusting and letting the students' abilities take charge was important. In the future, it will be necessary to examine the process by which students deepen their understanding of the question based on this experience.